

## これからの日本社会で古典教育がはたす役割は どうあるべきか

——「文化資本」の概念を用いて——

石 塚 修

### 1. はじめに

昨年12月の教育基本法の改正にともない、新たに「伝統・文化」の教育をどのように促進するかに注目が集まりつつある<sup>(1)</sup>。こうした傾向は、現行の『学習指導要領』『改善の基本方針』で、

(ウ) 古典に関する指導については、我が国の文化と伝統を尊重し、生涯にわたって古典に親しむ態度の育成を重視する<sup>(2)</sup>

と謳われていたり、平成14年2月21日付の中央教育審議会「新しい時代における教養教育の在り方について(答申)」での、

(4) ……日本人としてのアイデンティティの確立、豊かな情緒や感性の涵養には、和漢洋の古典の教養を改めて重視するとともに、すべての知的活動の基盤となる国語力の育成を、初等教育の基軸として位置付ける必要がある。

とする初等教育段階での「古典」重視の提言、また、平成18年2月13日付「中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会審議経過報告」にも、朗読を通して「子どもが古典や名作に触れ我が国の言語文化に親しむ機会とすることも重要である」<sup>(3)</sup>と明記されていたりするなど、最近の学校教育の場での一連の風潮となってきた。

では、こうしたときに用いられている「我が国の文化と伝統」とはどのような存在であり、それを「尊重」する態度とは、どのような方法で児童・生徒の内部に「育成」されるのが適切だと考えるべきなのであろうか。

この点について具体的に国語科教育の立場から言及している論考がどれほど存在しているのかというと、きわめて少ないというのが現状であろう。もちろん個々の古典作品を取りあげ、その古典教育内における意義を検証している論は多数見られる。しかし、「我が国の文化と伝統」の総体として最低限学習者に身につけさせるべき学習内容について、体系的学習計画を行い、それを基盤に教育内容を作品へと還元していくような視座は、これまでの古典教育論ではほとんど顧みられてこなかったのが実情ではなかろうか。そのことは内藤一志の古典教育論の整理を見ても明らかである<sup>(4)</sup>、渡辺春美の戦後古典教育論の整理からも同様のことが言える<sup>(5)</sup>。

現在の現場の教師が持っている古典教育への視座は、たとえば早乙女利光の「現在のところ、我々にできることは作品に対する精緻な読みを持ちながらも、その読みを提示するだけでおわることはないよう自戒することだけだ」というような、古典作品の内容の読解を中心としていけば

生徒たちにも古典の興味関心が自ずともたらされるところの考え方に代表される<sup>99</sup>。つまりは、古典教育に関する議論の多くはこうした視座からの教材（学習材）の選定や指導方法の改善に関する内向きの論にとどまり、我が国の社会全体に向けて古典教育の必要性を訴えかけ、その同意を得られるような外向きの論までは展開してこなかったのではなかろうか。

伝統・文化を尊重した教育によって、学習者にはどのような学習成果が付与されるのか、そのことについては教育する側から明確な説明をする責任があるはずである。そこを曖昧にしたまま大学受験という枠組みが取り払われてしまったら、もはや学習者の古典嫌いに拍車がかかっている現状をおしとどめることはできない。高校生にとって数学や物理を超えて嫌いな教科となってしまう古典<sup>100</sup>を、何とかして学習者のありようと密接に結びつく必要な存在として我が国の社会で位置づけなければ、せつかくの社会全体からの古典教育への期待も水泡に帰してしまいかねないだろう。そして古典との隔絶は、ひいては国家としてのアイデンティティの喪失にもさらに拍車をかけることにもつながりかねまい<sup>101</sup>。

しかし、ここで民族主義的発想による安易な古典教育振興を提案するものではない。古典教育の振興こそが、日本がこれからの国際社会において生き抜いていくための国家戦略と密接に結びつき、古典を学習することは、けっして無駄な営為ではなく、むしろ現代の日本人に有益な実利ももたらしてくれる教育内容であることを社会に認識してもらうための理由付けを提言しようとするものである。

古典教育の意義については、たとえば藤原マリ子のように、

古典の中に不易なもの、普遍的なものを見出して、精神的糧や人生の指針を得るとともに、現代と異質な発想や思想、価値観に触れて物事を多面的に捉え、相対化して眺める柔軟で奥深い見方ができる<sup>102</sup>。

と定義することは容易にできる。だが、こうした「不易流行」のステレオタイプの指導目標を掲げて古典教育の存続と振興を国語科教師が訴えても、はたして生徒たちも含めた社会全体の人々がそれにたいして賛意を持ってくれるだろうか。古典教育が現代の日本社会全体にいったい何をもたらすのかについて、国語科の立場から明確な発信をして、社会全体から支持を得られるようにしなくては、近年の伝統・文化重視による古典教育への関心が薄れ、やがてはその振興どころか存続さえも難しくなりはしないかと考える。それを防ぐためにも、いつまでも古典からは悩める現代人への人生の指針が見つけれられますといった情緒的な意義付けから離れて、新たな視座からの古典教育の必要性を説く時期が来ているのではなかろうか。

## 2. 「伝統・文化」をどうとらえるべきか

古典教育について考察していくとき、「伝統・文化」の問題は避けられない。本田和子は我が国の「伝統・文化」の問題について、

民族伝統の衰退と消滅が案じられているが、その中で、復活と活性化が図られねばならな

いのは何であり、それはどのような根拠に基づくのだろうか。とりわけ「子どもにとっての民俗の再生」とは何か。肝要なのは「行事」「習俗」のさながらの維持・保存や、「食事」「玩具」などのそのものの継承ではない。それにもまして、そのことにかつて付託されていた意味と、それがかつて子どもたちの間で発現されていた機能をとらえ直すことではないか、そして、仮に、それら意味と機能の欠如が、子どもらの生育にとって致命的な欠陥と見なしうるならば、そのことの現代的補完こそが図られるべきであろう<sup>100</sup>。

と指摘する。この指摘は先の藤原マリ子の古典教育の意義と一見すると重複するように思われる。しかし、本田の見解は「古典の価値に触れて普遍性を見出す」といった情緒的なものではなく、現代では失われた風俗・習慣の本来の意義の補完という営為をいかにして行っていくべきかという提言なのである。この考えを基にすると、古典教育とはたんに古典という「書物」を継承することに意義があるのではなく、古典に付託され継承されてきた機能について考えさせることが古典教育だということになる。

「伝統・文化」の重視を考察するには、その内容について規定する必要がある。「文化」が「伝統」と共立して理解される理由について、築島謙三『文化心理学基礎論』での「文化」の概念の整理を参考として考えてみたい。築島は複雑で多様な「文化」についての定義を6つに類型化して以下のように整理する。

人類学ではE・B・タイラーによる「文化」についての古典的定義以来夥しい数の文化の概念づけが試みられたが、それらの多くを集め註釈を加えた大冊がクローバーとクラックホーンの共著として刊行された。定義内容の性格にしたがい記述的、歴史的、規範的、心理学的、構成的、発生的の六つに分類している。次に各分類の中から一例ずつ示そう。

第一類 文化とは知識、信仰、芸術、道德、法律、風習および社会のメンバーとして人が獲得した能力、習慣のすべてを含んだ複合体である。(Tylor, E. B., 1871)

第二類 文化はわれわれの生活構造を決定する社会的に伝達された風習、信仰の集合である。(Sapir, E., 1921)

第三類 地域共同体あるいは部族の生活様式が文化であるが、……文化はすべての標準的な社会行動を含む。……部族文化というのは、その部族がしたがう標準的信仰と行動の集合である。(Wissler, C., 1929)

第四類 人間は適応のために努力することを学ぶが、その努力がつくりだした結果ないし産物が文化である。(Blumenthal, A., 1941)

第五類 一つの文化というのは、相互関連し相互依存する習慣的反応の諸類型からなる一体系である。(Willey, M., 1929)

第六類 文化は人間の集団がつくりだした産物である。(Croves, E. R., 1928)

これらの定義はそれぞれちがった観点にたってなされたものである。のべていることはみな正しく、相互対立する点は見られない。第一類は大体文化内容を項目的に列挙したものであり、第二類は伝達されるという点をあげているので歴史的とし、第三類は人々の行動の規

準を示しているもの、第四類は人間的適応の概念があらわれており、第五類はむしろ文化の性質をのべており、第六類は発生的観点にたっている<sup>141)</sup>。

このように築島は先行の「文化」論を分類整理して、その性質や成立について考察している。

築島の分類から見えてくる「文化」の発生・歴史・性質などの側面に共通する要素は何であろうか。それは、まず発生には「集団・社会」が不可欠であり、歴史的には「文化」はその社会が「継承」していく存在であり、さらに個人がその社会に適応する際に共通理解される行動をするための「規範」として必要な存在でもあるというのである。こう捉えると、いったん「文化」の継承が断絶してしまった場合に、次世代へ共通理解の感覚を継承することが難しくなり、ついにはその集団の構成員同士での共通理解がはかれなくなってしまう、集団そのものの存在意義が失われかねない。現代日本における「文化」に関わって起きている諸問題を考えたとき、この「伝達」の欠如による「伝統」の不安定さに起因している問題が多いとは言えないだろうか。同世代間での平面的な「伝達」はたしかに「流行」・「ブーム」といった形で存在しているものの、「継承」される異世代間での「伝達」はたして円滑になされているのだろうか。つい2・30年前までならば、日常生活で異世代間に営々と「継承」されてきた「常識」は、ここ20年でほぼ壊滅的になってきてはいないだろうか。たとえば和室の構造・和服の着用・和食の作法のいずれをとっても、今や家庭で「しつけ」という形で「継承」されている様子をほとんどみかけなくなってしまった。お箸の持ち方といった文化的基本動作までも学校教育に委ねられてしまうようになっていることから、そのことは容易に分かるであろう。実際その萌芽は、既に15年も前にも見られていた<sup>142)</sup>けれども、その傾向はその後ますます進んでしまっているようである。こうした問題は、なにも生徒だけの問題ではなく、教師の側でも起き始めている。昨年度、私の担当するある講義で国語科教員を目指す学生12名にたいして、「袖」の詠み込まれている和歌を提示するように求めたところ、そのうち9名が1首も挙げられなかった。また、実際の和服を示して「褌」の部分を示させようとしたところ、もはや全員が指示できなかったのである。「古典離れ」の現実、生徒どころか、教師にも蔓延し、しかもかなり深刻な状況にあると言えるのではなからうか。モノを知れば古典教育が成立するというわけではないけれども、ここまで指導者の側にも無関心が進んでしまうと、「しつけ」に見られるような和服の名称から由来して引き継がれてきた日本人の共通認識が継承されることなく消え去ってしまう可能性が高いと考えられないだろうか。

その一方で、村上隆の絵画に代表されるような日本の「伝統・文化」にヒントを得た新感覚の日本文化への国際社会からの期待の高まりもある。日本人が生活全般の西洋化から捨て去ろうとしている「伝統・文化」のメリットを、新感覚として西洋が受け入れているという倒置現象が起こっているのである。日本の「伝統・文化」がもたらすメリットを「継承」しないですませてしまうことによって生じる不利益は、もはや個人の損得を超えて日本社会や国家全体の問題として考えなくてはならない時期なのかもしれない。

かつて19世紀後半に「ジャポニスム」として我が国の文化がヨーロッパで憧憬の対象として開花したことは周知のことであろう。しかしながら、当時の我が国は脱亜入欧を目指し富国強兵を

進めており、積極的にその伝統文化を国際的外交戦略の武器にしようとはしなかった。その後も軍事国家としての道を進み、ついには敗戦を迎える。その軍事国家への反省から第二次大戦後に「文化国家」という言葉が盛んに用いられた時期があった。そのことについてジョン・ダワーが、

敗戦からまもない時期、もっとも流行したスローガンのひとつに、日本は「文化国家」をめざすべし、というのがあった<sup>(13)</sup>。

と指摘する。だが、その方向もやがて訪れた高度経済成長の波と共に、生産性を高めるという経済優先の国家経営方針の中で次第に希薄となり、政財界も含め、国家全体として我が国の「文化」をどう扱うかという共通理解が形成されないまま今日に至っている。この社会風潮が「伝統・文化」の継承を阻害する一つの要因となっていることは否定できない。昨今の日本経済の行き詰まりの中で、我が国の持つ「伝統・文化」に経済的価値を見出して、経済の活性化の起爆剤としようとする動きも一部に見られる。

日下公人は『新・文化産業論』の中で、

社会が存続していくためには、第一に物の再生産が必要である。日々消費される物財の補給である。つづいて第二は人の再生産である。人は死に、人は生まれてくる。子供を生んで育てなくては社会は消滅する。第三は価値観の継承が必要である。住まれてきた子供を教育して同じ価値観を与えなくては社会は別のものになってしまう。……第四に加えるとすれば、それは“文化開発”と呼ぶにふさわしいだろう。社会の多くの人が自己実現（＝幸福）の喜びを求め、そのために所得と時間と能力を多く注ぐような時代―したがって産業活動もそれに関するものが大きく成長する時代―それを私は文化開発の時代と呼んでみたい<sup>(14)</sup>。

と述べ、1970年代にすでに「文化開発」を我が国の国家的産業とすべきだと提言した。しかし提言されたのが経済成長の順調な情勢下であり、文化の価値そのものを産業としようとするこの提言はなかなか注目されなかったようである。ところが、バブル経済の崩壊後の我が国の産業界の低迷による閉塞感の中で、こうして「伝統・文化」を活用する提言に経済界が俄然注目し始めてきている。1997・8年に文化庁から出された「文化振興マスタープラン」には、

さらに、文化は、それ自体が固有の意義を有するとともに、同国民性を特色づけ、国民共通のよりどころとなるものである。…また一方、我が国が今後とも活力ある社会を維持し世界に積極的に貢献していくためには、先導性や独創性を一層発揮する方向へ転換を図ることが求められており、単なる量的な拡大を中心とする経済成長から、経済の質を高めていく方向への転換が必要となっている。これらの状況下で、とりわけ、創造力が求められる科学技術と文化は、国民生活や社会を支えるものとして、その重要性は急速に高まっている。心豊かな活力ある社会を形成していくためには、科学技術と文化はいずれも振興する必要がある、科学技術創造立国の実現とともに、文化立国の実現が不可欠である<sup>(15)</sup>。

とあり、「文化立国」の提言がなされている。こうした社会風潮を受けて、筆者は古典教育の活性化へのキーワードに「文化力」を用いることができるのではないかという視座からの提案を近年いくつか行ってきた<sup>(16)</sup>。この「文化力」という用語自体はまだ社会的には十分に熟してはいない

けれども、河合隼雄元文化庁長官の「文化力」の提言を受けての「文化の持つ、人々に元気を与え地域社会全体を活性化させて、魅力ある社会作りを推進する力」という定義がいちおうはなされている<sup>(17)</sup>。日本総合研究所富永哲郎もダグラス・マッ格雷イの「もし日本が自国の経済的混乱や軍備に対する不安を解決し、若い世代が独自の価値観や伝統をしっかりと主張できるようになれば、日本政府も十九世紀の変わり目に一時的に担った役割を取り戻すことができるのではないだろうか<sup>(18)</sup>」といった日本文化重視の指摘を受け、「ソフトパワー」として日本文化の力が、今や過去においても最高の水準に達していることに注目している<sup>(19)</sup>。杉浦勉も、

……こうした「文化力」にかかわる分野の産業は日本経済の死活を握る可能性がある。というのは、中国などの台頭で、従来の価格競争では日本企業が太刀打ちできなくなりつつあるからだ。今後の活路としては、品質のさらなる向上と、特許や著作権など、付加価値の高い「文化力」を製品に加味して勝負していくしかない。その意味で「知的戦略」が国家的に重要であることは間違いない<sup>(20)</sup>。

という見解を示しており、浜野保樹も、

われわれは小さな頃から繰り返し繰り返し、日本は資源のない小さな島国だと教わってきた。それが資源とは物的資源のことだという、偏った観念を植え付け、洗脳してしまった。しかし日本は文化資源の豊かな国であった。……

文化はその文化圏に属する者みんなが持っていて、誰も占有できず、誰も奪うことができない。それこそわれわれの最大の資源なのだ<sup>(21)</sup>。

と述べて、我が国は「文化」をもっと「資源」として活用していくべきだという見解を示している。

これらの論調は、いずれも現在の我が国の経済状況の閉塞感を打開するために、日本の独自性を持った文化を発信することによって、国際的地位の獲得が必要であることを説いている。まさに「文化力」は次世代の日本を考える上でのキーワードなのである。

### 3. 「文化資本」の概念と古典教育のあり方

もしも我が国の文化がこのまま継承されなかった場合に、将来においてどのような問題が生じるのだろうか。そのことを社会全体の問題として考える際に、フランスの社会学者ピエール・ブルデューの「文化資本」に関する言説を参考してみてもどうだろうか。ピエール・ブルデューは、従来は雰囲気や曖昧にとらえられていた個人の「趣味」「嗜好」を数値化して明確にし、「文化」を数値化可能な「資本」として見なした。そして、その数値化された「文化」の価値を「文化資本」と定義したのである。

文化資本 *capital culturel* 広い意味での文化に関わる有形・無形の所有物の総体を指す。具体的には、家庭環境・学校教育を通して各個人のうちに蓄積されたもろもろの知識・教養・技能・趣味・感性など(身体化された文化資本)、書物・絵画・道具・機械のように、物資とし

て所有可能な文化財的物(客体化された文化資本)学校制度やさまざまな試験によって賦与された学歴・資格など(制度化された文化資本)以上の三種類に分けられる。

ブルデューは、このように学校制度によって得られる「学歴資本 (capitai scolaire)」といわゆる人脈に近い「社会関係資本 (capitai social)」の概念とならぶ「文化資本」を提示している<sup>(23)</sup>。

片岡栄美は、この「文化資本」は家庭と学校で主に獲得され、家庭での様式は相続文化資本とし、学校での様式を獲得資本とする。そして、文化資本の特徴としては、

- ① 蓄積され、再生産されるということ。
- ② 投資され収益をあげるということ。
- ③ 他の資本、すなわち経済資本や社会関係資本と相互に転換する可能性があること。

の3点があると指摘する。これらの資本の特徴のなかから言語活動に関わるものとしては、会話力や説得力といった形の文化資本が挙げられ、これらが商談を成立させ、給与の上昇や昇進に結びつくことを例として示している<sup>(24)</sup>。

こうしたブルデューの「文化資本」の概念をふまえた社会学的見地は、「教養主義」が没落した<sup>(25)</sup>状況のなかで今後の古典教育の社会的位置づけを確認し、その必要性を社会全体に説明していく際に、役立つものと考ええる。古典教育の果たす役割は、国語科という教科にとどまらず、より大きな枠組みで考えられるということへの示唆を与えてくれるからである。

本来は個々人の内面に蓄積されて活用されている「文化資本」の概念を、教育全体に普遍することについての異論もあろう。しかし、国民一人一人の「文化資本」の積み重ねがなくては、社会全体に「文化力」がもたらされることはありえないのではなかろうか。このことは、たとえば倫理観の問題とも通じることであろう。社会全体、もしくはある企業に倫理観を求めても、構成する市民、所属する社員に倫理観がないままでは、たしてそれは得られるかと言えば、それは無理であろう。文化についても同様に言えるのではなかろうか。個々の「文化資本」の集大成が全体として国家の「文化力」に結びつくとしたならば、これまで「伝統・文化」の蓄積の継続がなされてきた結果として、我が国が今日の繁栄に至ったとするならば、その断絶は崩壊につながりかねないことを認識すべきであろう。

問題発見解決能力の育成が教育界で盛んに叫ばれる昨今、問題発見に至るための発想の源泉に何を置くのかについても考えられるべきである。独創的思考も源泉がなければ生じないからである。たとえば現代の近代科学の限界にたいする独創的解決策として柳田邦男が「あいまい文化」を提唱している<sup>(26)</sup>ことなどは、そうした発想の源泉に日本の「伝統・文化」を置いた例として評価されるべきであろう。

#### 4. 古典教育でめざすべき文化継承のあり方

我が国の古典教育は、これまで我が国の伝統・文化の継承にどれほど貢献してきたのであろうか。そのことを考えるのに、次の二人の先駆的国語教育者の古典教育観を見ておく必要がある。

時枝誠記は「古典教育の意義」の中で、

私は、古典といふものは、現代人が認めると否とに関せず、また、現代生活に役立つものがあるか否とに拘はらず、古典は古典として存在すべきものと思ふ。……

古典教育の意義は、むしろ、現代に無いものを求めるところにあるといふべきである。現代と相通ずるもの、現代的感觉に寄与するものを古典に求めるといふことは、古典に対する正しい態度とはいへないのではなからうか。古典に現代的意義を求める態度は、現代に対する過信から出てゐるのだと思ふ。現代人は、尚古思想に対する反動として、現代的なものを、過去一切のものが克服された頂点であると考えてゐる。従つて、過去のものに対して、現代に通ずるものにしか価値を置かうとしない<sup>(26)</sup>。

と述べ、古典教育の価値を「現代に無いもの」を求めさせ、日本のありのままの姿を見せて理解させる「惚れさせない古典教育」を提唱した。これにたいして西尾実「古典教材論」において、

古典は、その成立に於いて「古」であり、その意義に於いて「典」である。即ち、過去のある段階に於ける完成的作品であつて、後代の文化の源泉となり、範型になるものに外ならない。……我が国の歴史の上に於いて、文化の革新はもとより、政治的革新さえ、その過程に於いて、何等かの形で古典にその出発点を求めなかった例はない<sup>(27)</sup>。

と指摘し、「現代に通ずるもの」を教える点に古典教育の価値があると述べた。

この国語教育界を代表する二人の古典教育への見解に、先のブルデューの「文化資本」の概念を加味して考えたとき、今後の古典教育のあり方を模索するうえでのある方向性が見えてくると考える。時枝と西尾の見解は一見すると相対峙する見解と見られるけれども、実際にはそうではない。古典教育を軽薄な民族主義や教養主義による教育に陥らせることなく、いかに次世代へ古典で導かれる「伝統・文化」のあり方継承していくことが重要であるかを両説ともに説いているのである。この主張にそつて考えた場合、われわれが今、最も恐れるべきことは、古典の継承によりもたらされてきた「文化資本」の蓄積そのものが消滅しかねない現状であろう。このことは結果として、日本社会全体に、きわめて大きな不利益を生ぜしめる危惧をもたらすことを認識しなくてはなるまい。「古典」という我が国の貴重な「文化資本」を日本社会全体が放棄してしまうことは、たんに国語教育界の問題にとどまらず、国家としての経済的損失にまで結びついているということを、学習者も含めた社会全体の人々に認識させることが急務なのである。

我が国の持つ文化の特性を、アキバ系のアニメーション文化に群がる西洋人が評価している表層的な「かっこよさ」にのみとらわれることなく、他国の異文化と照らし合わせて冷静に見つめ、その根底にある日本文化の持つ感性の力を、日本の古典作品を学習材として、学習者に身につけさせることこそがこれからの古典教育のあるべき方向であると考え。そして、それらを基盤として国際社会において我が国の文化と伝統ふまえて自己を的確に表現していくことができる資質を学習者に涵養することも、これからの古典教育に求められる大切な役割なのである。

古典教育を通して、我が国の「伝統・文化」が日本の持つ大切な「文化資本」の蓄積であり、その継承はけっして無益なことではないことを生徒たちに教育していくことを国民全体に説明す



ることは、国語科の大切な役割の一つなのである。

ただしこの「伝統」の多くは大塚英志の指摘するように「国家により作られたもの」<sup>(28)</sup>であることも、同時に忘れてはならない事実でもある。海外向けの日本文化紹介の定番となっている「能」「歌舞伎」「茶の湯」「華道」といった「ことがら」の知識を増やすことを、そのまま短絡的に「伝統文化」への理解の深まりとしてしまうことは、「作られた」伝統・文化に迎合した、たんなる「海外向け日本文化案内」のページを個人の中に増やしているに過ぎないことも認識させるべきである。有名な古典作品の一部を無目的に丸暗記させたり、原文解釈能力を古典文法一辺倒の教育で一律に身につけさせたりするのではなく、古典が日本文化の中でなぜ発生し、世界的にどのような特性を持つ存在なのか、そこに気づかせるような学習づくりを古典教育はまずは目指すべきである。そうした学習を通して、学習者が縦軸には「伝統」の継承者としての自己を、横軸には「社会」の構成者としての自己の位置づけを行えるようにしむけていく古典教育こそが重要なのである。現在の日本がおかれている国際的地位を視野に入れたとき、天然資源もほとんどない我が国が諸外国と武力を用いずに対等にあり続けようとするならば、生徒たち個々の「文化資本」をさらに高め、その集合体して真に「文化力」を持つ国家を目指さなくてはならない時期を迎えているのである。そのためには、せっかく持ち得ている我が国の伝統・文化への理解と認識を深めさせ、それを生きて活用できるような発想力を国民に育成させていくことが不可欠であろう。

具体的には、筆者はこうした考えに立ち、「間」という語に注目した単元作りを提唱したことがある<sup>(29)</sup>。それ以外にも、樋口裕一が日本的な言葉の感性を代表する語として挙げる<sup>(30)</sup>「ほの」の一語から

ほのぼのと春こそ空にきにけらし天の香具山霞たなびく 新古今集 春 後鳥羽院  
の「ほのぼのと」や

起きあがる菊ほのかなり水のあと松尾芭蕉  
の「ほのかなり」と言った語へと展開していき、そこから「幽玄」や「わび」の感性へと結びつけた単元作りも可能となるとも考えている<sup>(31)</sup>。

さらに、「見渡す」という語に注目して、

見わたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける	古今集 春56	素性法師
見わたせば春日の野辺に霞立ち咲きにほへるは桜花かも	万葉集 巻10	1872
見わたせば比良の高ねに雪きえて若葉つむべく野はなりにけり	続後撰集34	平兼盛
見わたせば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋となにおもひけん	新古今集 春	後鳥羽上皇
見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとま屋の秋の夕暮	新古今集 秋	藤原定家 <sup>(32)</sup>

といった和歌の伝統を追跡したうえで、唱歌「見わたせば」（作詞 柴田清熙）

1. 見わたせば、青やなぎ、花桜、こきまぜて、みやこには、道もせに 春の錦をぞ。

佐保姫の、織りなして、降る雨に、そめにける。

2. 見わたせば、山べには、尾上にも、ふもとにも、うすき濃き、もみじ葉の 秋の錦をぞ。

竜田姫、織りかけて、つゆ霜に、さらしける。

なども加えた古典的感性の受容に関する学習も可能であろう。

さらに「見わたせば」の歌については、よく知られる「三夕の歌」と比較させたり、茶の湯の伝書『南方録』への受容とも関連づけて<sup>(33)</sup>、「定家仮名遣い」に代表される「定家」という中世期文化的シンボルの形成についての考究もできよう<sup>(34)</sup>。

## 6. おわりに

古典嫌いを生み出さないためには、どのような古典教育観にのっとった古典教育の方法が可能であるかを、もっと多くの教師たちが具体的に模索しなくてはなるまい。その前提には、生徒たちに毛嫌いされている古典が、じつは我が国の大切な国民資産の一つとして活用できることを認識させる必要がある。「説明責任」は何も実業界に限ったことではなく、教育界にも当然求められてしかるべきはずのものである。

古典教育の説明に、「資本」といった概念を取り込むこと自体に拒否反応が出てくることは当然予想される。古典とは崇高であり深遠な先人の生き方の結晶であり、だからこそ時代を超えて、それにふれる後人の人生の糧となったり、生きる指針を与える存在になるのだという立場からは、国家としての経済戦略に古典を役立てようなどという方向付けを批判するのは至極当然のことからである。しかし、好むと好まざるとに関わらず、我が国の「文化資本」が経済的に実際に役立っている例もある。京都の先端技術産業は伝統産業がベースに存在するものであったり、昭和63年に日産自動車が開発してブームとなった「シーマ」のデザインは、京都の大原三千院の阿弥陀三尊像のヒザの曲線のイメージだとされる<sup>(35)</sup>といった例は、けっして特殊な例ではなく、我々の発想の源泉に知らず知らずのうちに我が国の伝統・文化の影響があることの証左であろう。そして、そうした発想がもたらされる基盤を、古典という言語文化を通して培うことができる環境にあることが、我が国が他の先進国と比較してもどれほど恵まれた資源になっているかということについて、古典教育の立場からはもっと鮮明に打ち出されてしかるべきではないかと考える。

古典は長い歳月を経て現代人の前にある存在であるからこそ、そこに多様な価値が内包されている。また内包されている存在だからこそ今日まで残ってきたともいえる。経済的な価値ももたらずのであるから、実業面からも大いに保護せよと声高に一方的な価値観を押しつけるのは、かえって古典の持つその豊かさをそぐことにもなりかねないという意見もあろう。むしろ保護するのではなくて、古典を現実社会と切り結んだ存在として、個々人の独創的な発想に役立てていけるような古典教育を具体的に提言して実践すべきであると考ええる。そのためには、人生の糧とか、生きる指針の発見などと大上段に構えずに、自己の日常生活を一瞬立ち止まり「看脚下」させるような古典教育の確実な蓄積が何よりも肝要であると考ええる。

# 注

- (1) 「教育基本法」(2条5)には「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」という条文が盛り込まれている。
- (2) 文部省『学習指導要領解説国語編』東洋館出版 1999 p.4
- (3) 法令・報告の本文は文部科学省 HP によった
- (4) 内藤一志「『古典教育の現在』についての覚書」『語学文学』44 北海道教育大学語学文学会 2006 pp.11-19
- (5) 渡辺春美『戦後古典教育論の研究』溪水社 2004
- (6) 早乙女利光「『古典教育論』のあり方に関して」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊12-2 p.36 2005
- (7) 鳴島 甫「古典教育再考」『日本語学』126 明治書院 2007 pp.6-12 によれば、7割の高校生が嫌いな教科として「古典」を挙げているとする
- (8) 加藤朗はこうした現状を「国家的規模の『自分探し』ゲーム」と指摘する。『読賣新聞』2007.4.4 朝刊「和らんまん3」
- (9) 藤原マリ子「古典教育の再生を目指して」『国文学言語と文芸』121 国文学言語と文芸の会 おうふう 2004 p.83
- (10) 本田和子「子どもの世界」新谷尚紀ほか編『暮らしの中の民俗学』吉川弘文館 2003 pp.35-60
- (11) 築島謙三『文化心理学基礎論』頸草書房 1662 pp.97-98
- (12) 石井正巳ほか「中・高6ケ年を見通した古典の教材編成(その予備的調査1)」『筑波大学附属駒場中・高等学校研究報告』第32集(1992.12 pp.9-33)では「長押」「軒」がすでに理解できなくなっていたり、「袂」と「袖」の区別がつかない生徒の実態について調査・報告なされている。
- (13) ジョン・ダワー 三浦洋一ほか訳『増補版 敗北を抱きしめて』(上)岩波書店 2004 p.7
- (14) 日下公人『新・文化産業論』東洋経済新報社 1978 pp.8-9
- (15) 文化庁監修『新しい文化立国の創造をめざして』I-2「今なぜ文化立国か」1999 p.11
- (16) 石塚 修「開かれた古典教育を目指して」『月刊国語教育』東京法令 2001.9 pp.16-19  
「文化力を育てるための『古典教育』」『月刊国語教育研究』日本国語教育学会 2004.3 pp.50-55  
「解沢力から文化力を目指す古典教育を」『月刊国語教育』東京法令 2005.1 pp.36-39
- (17) 河合隼雄『文化庁月報』ぎょうせい 2002.2 p.5
- (18) ダグラス・マッグレイ／神山京子訳「世界を闊歩する日本のカッコよさ」『中央公論』2003.5 p.135 (2002 FORINE POLICY 130)
- (19) 富永哲郎「文化力と文化政策」<http://www.jri.or.jp/report/bunka.pdf>

- (20) 杉浦 勉「日はまた昇るーポケモン興国論」『文藝春秋』2003.10 p.190
- (21) 浜野保樹『模倣される日本ー映画、アニメから料理、ファッションまでー』祥伝社 2005 pp.240-241
- (22) ビエール・ブリュデュー『ディスタンクシオン [社会的判断力批判] I』石井洋二郎訳 藤原書店 1990 訳者まえがき
- (23) 片岡栄美「家族の再生産戦略としての文化資本の相続」『家族社会学研究』No.9 日本家族社会学会 pp.23-38 1997
- (24) 竹内 洋『教養主義の没落』中公新書 1704 2003
- (25) 柳田邦男『壊れる日本人ーケータイネット依存症への告別ー』新潮社 2005 pp.140-144
- (26) 時枝誠記「国語教育の方法」『時枝誠記国語教育論集 I』明治図書 1984 pp.92-94 (初出「国語教育に於ける古典教材の意義について」『国語と国文学』昭和23・4)
- ＊時枝誠記の古典教育観については、渡辺春美『戦後古典教育論の研究』(2004 溪水社)に詳細な検討がある
- (27) 西尾 実「古典教材論」『西尾実国語教育全集』第9巻 教育出版 1954 pp.435-439
- (28) 大塚英志『「伝統」とは何か』中公新書 p.19 2004
- (29) 石塚 修「解釈力から文化力を目指す古典教育を」『月刊国語教育』東京法令 2005.1 pp.36-39
- (30) 樋口裕一「消える日本語」くほの暗い『文藝春秋』2005.2 pp.305-306
- (31) 平成19年度全国学力・学習状況調査(文部科学省)「中学校国語A」8-6で『枕草子』の「春はあけぼの」の「あけぼの」についての問題が「代表的古典に親しんでいる」ことを調査する問題として出題されてもいる。
- (32) 水垣 久 <http://www.asahi-net.or.jp/~sg2h-ymst/yamatouta/sennin.html> 和歌検索サイト「やまとうた」を活用すると容易に類歌が検索できる。
- (33) 『南方録』に  
 紹鷗「わび茶の湯の心は、新古今集の中、定家朝臣の歌に  
 見渡せば 花も紅葉もなかりけり 浦の苫屋の 秋の夕暮れ  
 この歌の心にてこそあれ」と申されしと也  
 と見られることから侘び茶の精神を表現する際に利用されるようになる。
- (34) 「定家」のブランドを利用した例としては、「定家葛」「定家机」「定家煮」「定家文庫」「定家緞子」などの語が挙げられる。類似の例には千利休の名を連想させる「利休(久)鼠」「利休(久)煮」「利休(久)饅頭」がある。
- (35) 読売新聞社京都総局『京都一影の権力者たち』講談社 1994 p.58-59
- ＊なお本稿は2005年5月21・22日に開催された全国大学国語教育学会第108回大会での研究発表「古典教育における『文化力』育成の意義」を元とした。浜本純逸氏はじめ、席上ご指導・ご批評下さった各位に記して謝意を表します。